

國學院大學学術情報リポジトリ

近世後期における江戸相撲社会と渡世集団

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, みのり, Saitou, Minori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002505

齋藤 みのり 提出 学位申請論文

『近世後期における江戸相撲社会と渡世集団』 審査要旨

論文の内容の要旨

申請論文「近世後期における江戸相撲社会と渡世集団」は、近世後期における江戸相撲集団と在方相撲集団の展開を、江戸相撲年寄による在方相撲取の編成、在方相撲取の実態、地方都市などにおける興行の展開と地域社会との関係、書籍出版と相撲社会の展開など、従来研究の少なかった分野を史料の博搜と新史実の発見により実証的に論証した研究である。

本論文は以下の三部八章から成り立っている。

序章 近世相撲社会の世界

第一部 近世後期における江戸相撲集団と在方統制

第一章	相撲取の裾野―相撲取と在方相撲社会―
第二章	相撲年寄の渡世経営
第三章	江戸相撲社会の免許発給と在方統制
第二部	江戸相撲社会と地方渡世のかたち
第四章	相撲興隆期の在方地域における芸能意識と相撲興行
第五章	地方大寺社地における相撲興行―大宮氷川神社の事例から―
第六章	江戸相撲の地方都市部における興行形態―甲府芸能と相撲興行―
第三部	相撲社会の出版と権威発信
第七章	『古今相撲大全』の出版と近世相撲社会
第八章	上覧相撲後における出版物への歴史掲載と吉田司家
終章	近世相撲社会の体制と行く末

序章では、近世における相撲社会の展開を概観しながら先行研究を整理し、本研究の課題として、相撲年寄を中心とした江戸相撲集団の活動、特に在方相

撲社会との関係を掲げ、本論文の構成を説明している。

第一部は、江戸相撲社会の内部および在方相撲社会の活動に注目した論考である。第一章は、まず寛政期刊行の『大相撲綽名出所記』から三都の相撲取が多く在方の出身であることを確認し、近世後期に各地の在方相撲集団が発展したことにより、そこを出身として三都の相撲取の多くが出現したと主張している。かつ各地の在方相撲集団による相撲興行の様相を明らかにし、廃業した相撲取が出身地の村に帰農する事例などを紹介しながら、在方相撲集団が独自に活動し興行しながらも、江戸相撲集団の活動を下支えし、江戸と在方の間での的な循環があったことを論証している。第二章では、江戸の四季勧進相撲番付などから相撲の勧進元・差添・世話役を一覧にし、興行の中心となった相撲年寄と相撲部屋の系譜を考察するとともに、有力な相撲年寄が在方の相撲集団に介入し統制していく様相を明らかにしている。十八世紀後半の明和期には武蔵・上野国の在方相撲集団を江戸相撲年寄が統制するようになり、ついで天明期には甲府の稽古場建設に関わるなど、相撲年寄が次第に広範な在地の相撲集団を

編成していくことを指摘し、また幕末には江戸相撲年寄が合同で在方に積極的に進出し、興行収益を目指していたと主張している。第三章は江戸相撲年寄が在方相撲集団に免許を発行しながら師弟関係を結び、統制を加え組織化していく多くの事例を検討し、免許が持つ意義や権威の象徴性、免許を受けた在方相撲集団の様相について考察を加えている。かかる体制が文化年間には形成され、免許発行が相撲年寄の収入源ともなるとともに、在方相撲集団が権威を得て地域における渡世の優位性を確保していたと論じている。

第二部は、宿場町・門前町や地方都市において興行された相撲興行や相撲取の活動について検討を加えている。第四章では、江戸近郊の中山道蕨宿の年寄役岡田善休の日記を中心に、相撲興行の実態、地域の人々が娯楽文化として相撲を認識していく様相、この風潮に便乗する若者やアウトローの存在などを考察し、在方相撲社会の形成されていくさまを描いている。近世後期の娯楽文化や余暇活動の展開・消費の拡大、力石の存在や他の芸能興行なども考察に加え、多様な芸能文化の発展の中で在方相撲社会を位置づけようと試みている。さら

に地域出身の相撲年寄や相撲取りと地域との関係にも触れている。第五章は、中山道大宮宿における氷川神社の相撲興行を考察している。大宮宿は宿駅であるとともに武蔵一之宮氷川神社の門前町的な性格を有しており、神事としての相撲や奉納相撲が興行される地であった。興行の準備は神社・大宮宿だけでなく近隣の村々も参加し、相撲は江戸相撲集団が中心に担い、幕末には近隣の在方相撲集団も参加しており、地域の一大娯楽だけではなく、江戸相撲の重要な巡業先となっていたと論じている。第六章では、甲府における江戸相撲集団の相撲興行を検討し、巡業体制の展開と甲府の興行主や甲斐国の在方相撲集団との関わりを論じている。甲府は十七世紀後半から十八世紀前半には城下町として武士に相撲が受容されており、のち幕府直轄領となっても甲府勤番として旗本集団が在住したという特徴をもつ。十八世紀後半以降には興行主亀屋与兵衛が江戸相撲集団と結びつくとともに、次第に相撲年寄が複数で組み合わさった江戸相撲集団の興行が行われ、さらに在方相撲集団も参加し、甲府は江戸相撲集団の興行の一大拠点になっていくと主張している。

第三部では、近世後期に刊行された相撲関係の書籍の検討から、江戸相撲集団の権威の発信を論じている。第七章は、宝暦十三年（一七六三）に出版された『古今相撲大全』を近世の相撲社会における本格的な書籍出版の嚆矢と位置づけ、古代から朝廷行事として行われていた相撲節会や野見宿祢の伝説、古代中世の合戦譚にみえる武家故実としての相撲などという内容から、相撲社会が歴史故実を取り上げながらその由緒と権威の正統性を発信し、読者や社会に提示した書物と主張している。第八章では、寛政三年（一七九一）將軍徳川家斉の上覧相撲で江戸において相撲の名声を高めた行事吉田司家の由緒と権威が、以後の相撲出版物に如何に影響したかを検討している。上覧相撲以後に出版された『相撲隠雲解』『角觥詳説活金剛伝』『相撲起顕』などの記載内容から、吉田司家の家伝が相撲の歴史故実として定着することとなり、上覧相撲の評判とも相俟って、これらの出版が社会に江戸相撲社会の権威を認知させる手段となっていたと論じている。

終章では、幕末維新期の江戸相撲社会を概観するとともに、近世後期に江戸

相撲社会が興行に即した職能渡世集団として機能し、東日本を中心とした広範な地域において在方相撲社会を包括した興行統制体制を整え、自らの権威をも醸成したと論じている。かつ江戸―在方を包括した一大相撲社会が、武家社会や三都の社会・町や村の地域社会の文化・芸能など幅広い分野と複雑に重なり合って、社会の中で位置づけられていたと総括している。さらに今後の課題として、一層の各地の史料の渉猟と史実の集積、近世相撲社会と出版文化との関係の検討、近世近代移行期における在方相撲社会の実態解明を掲げている。

論文審査の結果の要旨

申請論文は序章と三部八章および終章からなり、近世後期における江戸相撲集団と在方相撲集団の展開を、江戸相撲年寄による在方相撲取の編成、在方相撲取の実態、地方都市などにおける興行の展開と地域社会との関係、書籍出版と相撲社会の展開などを、史料の博搜と新史実の発見により実証的に論証した研究である。

序章では、近世における相撲の研究史を整理し、研究史の中に筆者自身の研究

課題を位置づけている。

第一部「近世相撲社会の世界」は三章からなり、第一章「相撲取の裾野―相撲取と在方相撲社会―」では、近世後期の相撲集団が多く在方出身の相撲取によって構成され、ことに江戸相撲社会を在方相撲社会が支えていたと論じ、手堅い論考となっている。また在方相撲集団が実施した興行の実態や、廃業した相撲取りが帰農する過程など、相撲集団と地域社会との関係を論証した点が評価できる。

第二章「相撲年寄の渡世経営」は、江戸の四季勧進相撲番付など興行の中心となつた相撲年寄と相撲部屋の系譜を考察し、有力な相撲年寄が在方の相撲集団に介入し統制していく様相を解明している。さらに江戸相撲年寄が在方相撲集団を統制していく過程を、明和三年（一七六六）江戸相撲年寄連署廻状から論じているが、これは江戸相撲集団が在方相撲集団を編成した時期を従来の研究より遡らせる検証となっている。第三章「江戸相撲社会の免許発給と在方統制」は、江戸相撲年寄が在方相撲集団に免許を発行しながら師弟関係を結び、組織化していく多くの事例を検討しており、筆者が史料を渉猟して各地の事例を収集した成果である。

また免許状の内容から、江戸相撲年寄の権威や由緒の所在、在方相撲集団の興行の実態を解明している。かつ江戸相撲集団が在方相撲集団を統制し、免許発行が相撲年寄の収入源ともなり、一方で在方相撲集団が権威を得て地域における渡世の優位性を確保していたと論じ、江戸・在方とも相互に依存した相撲社会の様相を考察している。以上第一部では、江戸相撲社会と在方相撲社会との相互の関係と活動内容が論証され、大きな成果となっている。

第二部「江戸相撲社会と地方渡世のかたち」は三章からなり、宿場町・門前町や地方都市の相撲興行や相撲取の活動を論じている。第四章「相撲興隆期の在方地域における芸能意識と相撲興行」は、江戸近郊の中山道蔵宿における文化や芸能の発展のなかで相撲興行を考察している。在方相撲社会が形成されていく様相を地域社会・文化のなかで位置づけようと試みている点が評価できる。第五章「地方大寺社地における相撲興行——大宮氷川神社の事例から——」は、中山道大宮宿における武蔵一之宮氷川神社の相撲興行を考察している。氷川神社の門前町的な性格をもつ大宮宿で興行された神事相撲や奉納相撲について、神社・宿・近隣地

域および江戸相撲集団の活動を検討し、各階層の動向を説明した論稿である。第六章「江戸相撲の地方都市部における興行形態——甲府芸能と相撲興行——」では、甲府における江戸相撲集団の相撲巡業体制の展開と、甲府の興行主や甲斐国の在方相撲集団との関わりを手堅い分析で明らかにし、地方都市における相撲興行を具体的に検討している。以上第二部では、江戸相撲集団の地方興行と受容する地域の社会・文化、また江戸相撲社会と関係を深めていく在方相撲社会の展開を具体的に説明しており、従来研究の少なかった分野を新たに広げた論稿といえる。

第三部「相撲社会の出版と権威発信」は二章からなり、近年盛んになった書籍研究の成果を取り込もうとした意欲的な考察であり、相撲関係の書籍の検討から、江戸相撲集団の権威の発信を論じている。第七章『古今相撲大全』の出版と近世相撲社会」は、『古今相撲大全』を、本格的な相撲書籍出版の嚆矢と位置づけ、その内容の分析から相撲社会が由緒と権威の正統性を発信し、読者や社会に提示したと主張する。書籍出版と相撲故実から相撲の権威発信を見ようという点は、近年進展した書籍研究を取り込もうとする意欲が見られる。第八章「上覧相撲

後における出版物への歴史掲載と吉田司家」では、寛政三年（一七九一）將軍徳川家齊の上覧相撲で江戸における相撲の名声を高めた行事吉田司家の由緒と權威が、以後の相撲出版物に如何に影響したかを検討している。上覧相撲以降に、吉田司家の家伝が相撲の歴史故実として定着し、相撲関係書籍の出版が江戸相撲社会の權威を認知させる手段となったと論じている。書籍出版の動向から相撲故実・相撲の權威発信を論じようとする点は興味深いが、論証には近世の出版文化の動向を考慮しつつ、書誌学的な分析などさらに基礎的な考察が必要である。

終章において幕末維新期の相撲社会を概観し課題とするとともに、今後の課題を列挙している点は首肯できる。

以上本論文は、近世後期の江戸相撲社会と在方相撲社会の発展や相互の関係、相撲関係書籍の出版と相撲社会の權威発信について、博搜した史料について緻密に検討を加えながら、新たな史実を提示し、手堅い実証的な論証により従来の研究に訂正を加えている。とくに在方相撲社会の様相や江戸相撲年寄の統制の実態、宿場町・門前町・地方都市の相撲興行などの説明は、従来の相撲研究を進展させ

た論考と評価できる。

ただし問題点も少なからず存在する。第一に相撲社会や渡世集団などの語を用しながらも、筆者がその全体像を如何に考えているのかという叙述がなく、本論文が指摘する史実や検証によって、相撲社会や渡世集団の構造が従来の研究と如何に変わったのかを明確にしていない。第二に、相撲興行を芸能文化としているが、他の芸能文化と比較検討しておらず、近世後期の社会・文化の展開に位置づけていない。さらに相撲取の肉体に対する視線やそこから起こる差別など、身体性についての考察も今後の課題である。第三に、三都で活躍する相撲取の出身を豪農・村役人層など村落の上階層と想定し、彼らを在方相撲社会の中核に置いて、江戸と在方の相撲社会を結びつけているのは、申請論文の大きな成果ではあるが、相撲社会の裾野には下層民出身の者や博徒が存在し、興行主にも博徒があり、相撲取出身の博徒が治安問題を起こしている。そのようなアウトロー集団と相撲社会との関係が考察から捨象されている。これらの点は、今後筆者が近世の相撲社会を総合的に論ずる上で不可欠となろう。

以上今後の課題はあるものの、近世後期の江戸相撲社会と在方相撲社会との関係を解明して従来の研究に訂正を加え、在方における相撲興行の展開を具体的に検証し、さらに相撲関係書籍の刊行から渡世集団の権威発信を論じた本論文は、相撲社会のみならず近世後期の芸能・文化および社会の研究に寄与しうる研究成果と評価できる。

よって本論文の筆者齊藤みのりは、博士（歴史学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和三年十二月十一日

主査	國學院大學客員教授	根岸茂夫	印
副査	國學院大學教授	吉岡孝	印
副査	学習院大学名誉教授	高埜利彦	印

齊藤　みのり　学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（歴史学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和三年十二月十一日

学力確認担当者

主　査	國學院大學客員教授	根　岸　茂　夫	印
副　査	國學院大學教授	吉　岡　孝	印
副　査	学習院大学名誉教授	高　埜　利　彦	印